

第 99 期部門長挨拶

部門長（第 99 期）大高敏男

このたび、第 98 期中田俊彦部門長（東北大学）の後を引き継ぎ、部門創設 30 年の節目にあたる第 99 期部門長を務めさせていただくことになりました、国士舘大学の 大高敏男です。何卒よろしくお願ひいたします。今期の技術と社会部門の運営に関しましては、佐藤智明副部門長（神奈川工科大学）、田辺基子幹事（神奈川工科大学）をはじめ、運営委員会委員の皆様と力を合わせて、さらなる部門の発展、部門登録会員の皆様へのサービス向上、社会貢献に精一杯努力して参ります。



さて、新型コロナウイルス感染拡大防止措置が昨年より引き続き継続されており、緊急事態宣言下の東京でこの挨拶文を書いています。この 1 年は専門家の発信が社会に大きな影響を与えることを改めて痛感した年でもありました。専門家は、社会との繋がりの中で、**どのタイミングで誰に向けて何を発信**するのかが極めて重要であるということを強烈に再認識させられた年でもありました。もしもこの中のひとつでも誤った判断がなされれば、社会は混乱し、経済も混乱します。人々の中の不安や不満は大きくなっていくでしょう。本来工学には、社会を豊かにし、人を幸せにする、そこで誰かが困っているからなんとか解決しようという理念があり、その上にこれに資する各専門分野が学術体系として立てられています。そして、工学に携わる技術者や研究者は、その道のプロたる「スペシャリスト」、あるいは「専門家」なので、常に社会との繋がりの中で工学的課題にチャレンジしていかなければならないのです。さらに、グローバル化が進んでいる現代においては、世界的視野に立ったその行動が求められています。

最近、海外に製造拠点を置く日系企業の友人からたびたび耳にする問題があります。それは、日本の製造拠点と同じ図面、同じ製造設備を導入しても日本国内で製造した製品より品質が低下することがあるというもので、いわゆる“日本式ものづくり”の課題を示唆するものです。外国にはその国の文化とそれを育てた歴史や人々があり、これらに敬意を払うことや多様な価値観を理解することが製品の品質向上にとって重要な要素であるといえます。相互理解に基づき、その地域・国やそこで生活する人々に資する取組は、同時に私たち自身や自社の技術、産業も発展させるからです。

こうした取組は元来日本が伝統的に実践してきた基本姿勢のひとつで、最も得意とする規範のひとつでもあり、ものづくりの“強み”でもありました。これらは、例えば、技術史や機械遺産から事実として学ぶことができます。工学の根っこの部分には、相互理解、文化理解、歴史理解、技術教育、倫理教育といった基盤となる普遍的な取組が必要不可欠であり、このような視点から未来の機械工学を展望することには大きな価値と意義があると考えます。

技術と社会部門では、こうした分野を広くカバーし、多様な分野の専門家と議論する場が提供されています。これまでに、技術者倫理、工学教育、環境・エネルギー教育、技術史や機械遺産、法工学など、多くの分野横断的で実践的な課題を取りあげ発信してきました。そして、①技術者倫理や知的所有権など技術者が専門職として活躍するための倫理的、法的規制のあり方を研究する分野、②技術、工学の歴史を研究する分野、③技術者の人材育成や継続教育のあり方やそれらの方法を研究する分野、さらには、新たな社会システムの提案を目標に据えた活動等を積極的に進めています。学術への貢献はもちろんのこと、年次大会や部門講演会では、技術史や機械遺産をテーマとするワークショップの企画、市民を対象とした工学教育プログラムや、技術倫理、技術・工学教育、設計教育、技術史などの OS 企画を行っています。また、コンテストや技術倫理セミナーなどを企画して開催しております。

さらに、部門間連携、他学協会連携、人材育成、産業界への貢献も行っています。恒例となっているイブニングセミナーはまもなく 240 回目に到達し、開催方法を工夫しながらますます盛り上げていきたいと考えています。また、隔年で「経営と技術移転／技術と社会に関する国際会議」International Conference on Business and Technology Transfer / Technology and Society (ICBTT/TS) を開催しており、海外の研究者・技術者、経営者との交流を深めています。

社会を豊かにし、人を幸せにするモノを創出して提供していくためには、「学術的な価値」と「工業的な価値」の両方が必要ですが、そのためには技術と社会の連関が鍵となります。技術と社会部門は、このような観点から、分野横断的な議論を行う場を提供できる唯一の部門です。多くの方々に興味を持って頂けると大変嬉しく思います。

さて、2021 年度はまだ新型コロナ感染拡大の影響が残っていて、先行きが見えない状況であります。しかし、このコロナ禍を新時代への試練とポジティブに捉えることにし、部門運営に全力で取り組んでいきたいと考えております。日本機械学会会員のみなさまの期待にも応えうる技術と社会部門へとより発展できるよう微力ながら取り組んでいきたいと思っています。どうぞ、ご支援ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2021 年 3 月